



標本に基づく大阪湾初記録のアオハタ

木村祐貴

Author & Article Info

地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所
水産技術センター（岬町）
KimuraY@o-suishi.in.arena.ne.jp

Received 29 August 2022
Revised 01 September 2022
Accepted 03 September 2022
Published 04 September 2022
DOI 10.34583/ichthy.24.0_6

Yuki Kimura. 2022. First specimen-based record of *Epinephelus awoara* (Temminck and Schlegel, 1843) from Osaka Bay, Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 24: 6–8.

Abstract

A single specimen of *Epinephelus awoara* (Temminck and Schlegel, 1843) was collected from Osaka Bay, Japan, in May 2022. In Japanese waters, *E. awoara* has been recorded from the Sea of Japan coast from Yamagata Prefecture to Yamaguchi Prefecture, the East China Sea coast of Nagasaki and Kagoshima prefectures, the Pacific coast from Sagami Bay to Yaku-shima island, the Seto Inland Sea and Kagoshima Bay. Thus, the present specimen, described herein detail, represents the first specimen-based record of the species from Osaka Bay.

アカハタ属 *Epinephelus* Bloch, 1793 は日本国内で 44 種が知られており（中村・本村, 2022）、アカハタ *E. fasciatus* (Forsskal, 1775) やクエ *E. bruneus* Bloch, 1793 などの水産重要種を多く含んでいる。本属は背鰭棘数が 11、臀鰭軟条数が通常 8、腹鰭起部が通常は胸鰭基底部の直下もしくは後方に位置する、および口蓋骨に歯をもつなどの分類形質により他属と識別される（Heemstra and Randall, 1993；瀬能, 2013；中村・本村, 2022）。一方で、本属には多様な形態をもつ多くの種が含まれることから、日本国内に出現する種に限っても形態的な定義を定めることは困難とされている（中村・本村, 2022）。

アオハタ *E. awoara* (Temminck and Schlegel, 1843) はこれまでに山形県から山口県の日本海沿岸、長崎県から鹿児島県の東シナ海沿岸、相模湾から屋久島の太平洋沿岸域、瀬戸内海および鹿児島湾から報告があり、日本周辺では温

帯域の岩礁や砂泥底に生息していると考えられる（瀬能, 2013；本村, 2022）。2022 年 5 月 18 日に大阪湾で実施した底生生物採集調査でアオハタが採集された。大阪湾における本種の記録はあるものの（稲葉, 1988）、その根拠については不明であった。よって、本標本は大阪湾からの本種の確かな記録となるため、ここに報告する。

材料と方法

計数・計測方法は Heemstra and Randall (1993) にしたがった。標本の作製と登録は本村（2009）にしたがった。体各部の計測はデジタルノギスを用いて 0.1 mm の精度で行った。標準体長 (standard length) は体長または SL と表記した。アオハタの記載年は中村・本村（2022）にしたがい 1843 年とした。本報告で使用した標本は大阪市立自然史博物館 (OMNH-P) に登録、保管されている。

Epinephelus awoara (Temminck and Schlegel, 1843)

アオハタ

(Fig. 1)

標本 OMNH-P49630, 体長 53.7 mm, 大阪府阪南市沖 (34°23'38.2"N, 135°11'40.4"E), 水深 21.5 m, 湊丸, 2022 年 5 月 18 日, 石桁網。

記載 背鰭条数 XI, 15；臀鰭条数 III, 8；胸鰭軟条数 17；腹鰭条数 I, 5；縦列鱗数 95；側線有孔鱗数 49；鰓耙数 10 + 16 = 26。体各部の体長に対する割合 (%)：頭長 40.6；吻長 7.4；体高 31.3；眼窩径 12.8；両眼間隔長 5.4；眼下骨高 5.2；上顎長 19.0；尾柄高 11.0；尾柄長 19.0；背鰭前長 36.9；臀鰭前長 66.1；腹鰭前長 40.8；背鰭基底長 54.6；背鰭第 1 棘長 8.9；背鰭第 2 棘長 12.8；背鰭第 3 棘長 17.9；背鰭第 4 棘長 16.6；背鰭第 5 棘長 17.5；背鰭第 6 棘長 16.0；背鰭第 7 棘長 16.9；背鰭第 8 棘長 15.6；背鰭第 9 棘長 16.0；背鰭第 10 棘長 14.5；背鰭第 11 棘長 13.6；最長背鰭軟条長（第 8 軟条）20.3；臀鰭基底長 19.4；第 1 臀鰭棘長 6.9；第 2 臀鰭棘長 12.8；第 3 臀鰭棘長 12.5；最長



Fig. 1. Fresh specimen of *Epinephelus awoara* (OMNH-P49630, 53.7 mm SL) from Osaka Bay, Osaka Prefecture, Japan.

臀鰭軟条長（第4軟条）19.4；尾鰭長24.6；胸鰭長25.0；腹鰭長22.0。体は側扁し、前後に伸長した楕円形。吻はやや尖り、体背縁は吻端から背鰭起部にかけて上昇し、そこから尾鰭基底部にかけて緩やかに下降する。体腹縁は吻端から腹鰭起部にかけて緩やかに下降した後、臀鰭基底部まで体軸とほぼ平行にはしり、臀鰭基底部から尾鰭基底部にかけて緩やかに上昇する。眼と瞳孔は正円形。鼻孔は2対で近接し、眼の直前に位置する。前鼻孔後縁に皮弁を有する。口は端位で、下顎が上顎より突出し、上顎後端は眼の後縁直下に位置する。前鰓蓋骨後縁は鋸歯状。鰓蓋後縁は円滑で、主鰓蓋骨中央に3本の扁平な棘を有するが、最上方の棘の大部分は皮下に埋没しており目立たない。肛門は背鰭第9棘基部直下に位置する。側線は完全で、主鰓蓋骨上端から尾鰭基底部にかけて体背縁と平行にはしる。背鰭起部は鰓蓋後端の直上に位置し、背鰭基底後端は臀鰭基底後端よりも後方に位置する。胸鰭基底前端は背鰭起部のわずかに前方、腹鰭基底前端は背鰭第2棘基部直下、臀鰭基底前端は背鰭第1軟条基部直下にそれぞれ位置する。たまたんだ腹鰭後端は背鰭第6棘基部直下に達する。尾鰭は円形。体側鱗は円鱗。

色彩 生鮮時、頭部の地色はやや薄い暗褐色。体側の地色は暗褐色。体全体に黄色がかった褐色の小斑点が散在する。各鰭の地色は暗褐色。体側には背鰭中央部を起部とする4本の暗色横帯と尾柄部に1本の暗色横帯がある。暗色横帯の縁に沿う黒点はない。

分布 本種は山形県から山口県の日本海沿岸、長崎県から鹿児島県の東シナ海沿岸、相模湾から屋久島の太平

洋沿岸、瀬戸内海、大阪湾、鹿児島湾から報告されているほか、未確定情報ながら小笠原諸島からも記録がある（瀬能，2013；竹内ほか，2015；鎗木，2016；Motomura and Harazaki, 2017；Iwatsuki et al., 2017；岩坪・本村，2017；園山ほか，2020；小枝ほか，2020；村瀬ほか，2021；岩坪ほか，2022；工藤ほか，2022；本研究）。

備考 本標本は背鰭棘数が11であること、臀鰭軟条数が8であること、尾鰭が円形であること、体側上半部の暗色横帯の縁に沿う黒点がないこと、生時、体側に黄色い斑紋が散在することから、瀬能（2013）が報告したアオハタ *Epinephelus awoara* の標徴とよく一致したため本種に同定された。

本種は日本海南部沿岸に多く生息する一方、太平洋沿岸には少ないとされている（池田・中坊，2015）。瀬戸内海では、大阪湾、周防灘、伊予灘から報告があるが、これらの証拠となる標本は示されていない（稲葉，1988）。また、大阪湾を含む瀬戸内海で採集された魚類標本をまとめた波戸岡・花崎（2017）でも本種の記録がなく、本標本が標本に基づく大阪湾からの初めての記録となる。瀬戸内海における本種の出現は稀とされているが（稲葉，1998）、1990年代以降、瀬戸内海中・西部海域では本種の出現がみられている（重田，2008）。しかし、再生産を認めるほど大量に採集されることはないことや（重田，2008）、瀬戸内海東部海域からの報告が稲葉（1988）と本研究に限られることから、現在のところは本種が瀬戸内海での分布を拡大しているとはいえず、生息数の顕著な増加も認められない。

本標本が採集された地点で採泥調査を行ったところ、

底質はわずかに砂が含まれる泥であり、本種が好むとされる底質（瀬能，2013）に概ね一致した。本種は大きいもので体長 500 mm に達すること（池田・中坊，2015），同属のキジハタは 1 歳時には 100 mm を大きく超えることから（俵積田ほか，2019），本標本は生後 1 年未満の個体であると考えられる。一方，著者が実施している大阪湾内での底生生物採集調査や大阪府内市場での水揚げ物調査において，本種を目撃例がなかったことから，本標本は内海で再生産されたものではなく太平洋側から加入してきたと考えるのが妥当であろう。本種は主に九州地方で黄アラ，黄ハタ，アオナなどと称され，重要な漁獲対象種の一つとして扱われている（畑，2020）。しかしながら，本種の生態学的知見は不足しており，ヒメジ *Upeneus japonicus* (Houttuyn, 1782) 等の小型魚類を餌として利用していることが断片的に報告されている程度である（小枝・本村，2017）。今後，本種の資源管理に資するための生態学的知見が集積されることを期待する。

謝 辞

本研究を行うにあたり，岡田浦漁業協同組合の後舎弘氏には標本の採集にご尽力を賜った。大阪市立自然史博物館の松井彰子氏には標本の収蔵に際して便宜を図っていただいた。ここに感謝の意を表する。

引用文献

- 畑 晴隆. 2020. アオハタ, p. 223. 小枝圭太・畑 晴隆・山田守彦・本村浩之（編）大隅市場魚類図鑑. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. [URL](#)
- 波戸岡清峰・花崎勝司. 2017. 瀬戸内海産魚類標本目録. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録, 48: 1–204.
- Heemstra, P. C. and J. E. Randall. 1993. FAO species catalogue. Vol. 16. Groupers of the world (family Serranidae, subfamily Epinephelinae). An annotated and illustrated catalogue of the grouper, rockcod, hind, coral grouper, and lyretail species known to date. FAO, Rome. viii + 382 pp. + xxxi pls.
- 池田博美・中坊徹次. 2015. 南日本太平洋沿岸の魚類. 東海大学出版部, 秦野. 597 pp.

- 稲葉明彦（編）. 1988. 増補改訂瀬戸内海の生物相 II. 広島大学理学部附属臨海実験所, 向島町. 475 pp.
- 岩坪洗樹・伊東正英・山田守彦・本村浩之（編）. 2022. 薩摩半島沿岸の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 枕崎・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 329 pp.
- 岩坪洗樹・本村浩之. 2017. 火山を望む甕海 鹿児島湾の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 鹿児島・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 302 pp. [URL](#)
- Iwatsuki Y., H. Nagino, F. Tanaka, H. Wada, K. Tanahara, M. Wada, H. Tanaka, K. Hidaka and S. Kimura. 2017. Annotated checklist of marine and freshwater fishes in the Hyuga Nada area, southwestern Japan. Bulletin of the Graduate School of Bioresources, Mie University, 43: 27–55. [URL](#)
- 鍋木紘一. 2016. 種子島の釣魚図鑑. たましだ舎, 西之表. 158 pp.
- 小枝圭太・畑 晴隆・山田守彦・本村浩之（編）. 2020. 大隅市場魚類図鑑. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. [URL](#)
- 小枝圭太・本村浩之. 2017. 鹿児島大学総合研究博物館に所蔵されている胃内容物魚類標本. Nature of Kagoshima, 43: 257–269. [URL](#)
- 工藤孝浩・山田和彦・三井翔太・門田高太・瀬能 宏. 2022. 三浦半島南西岸魚類目録. 神奈川自然誌資料, 43: 97–142. [URL](#)
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp. [URL](#)
- 本村浩之. 2022. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. Online ver. 16. [URL](#) (15 Aug. 2022)
- Motomura H. and S. Harazaki. 2017. Annotated checklist of marine and freshwater fishes of Yaku-shima island in the Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan, with 129 new records. Bulletin of the Kagoshima University Museum, 9: 1–183. [URL](#)
- 村瀬敦宣・緒方悠輝也・山崎裕太・三木涼平・和田正昭・瀬能 宏（編）. 2021. 新・門川の魚図鑑：ひむかの海の魚たち. 宮崎大学農学部附属フィールド科学教育研究センター延岡フィールド, 延岡. 358 pp.
- 中村潤平・本村浩之. 2022. ハタ科 Serranidae とされていた日本産各種の帰属，および高次分類群に適用する標準和名の検討. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 19: 26–43. [URL](#)
- 瀬能 宏. 2013. ハタ科, pp. 757–802. 中坊徹次（編）日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野.
- 重田利拓. 2008. 瀬戸内海の魚類に見られる異変と諸問題. 日本水産学会誌, 74: 868–872. [URL](#)
- 園山貴之・荻本啓介・堀 成夫・内田喜隆・河野光久. 2020. 証拠標本および画像に基づく山口県日本海産魚類目録. 鹿児島大学総合研究博物館研究報告, 11: 1–156. [URL](#)
- 竹内直子・瀬能 宏・清野聡子. 2015. 対馬の魚類相 1948–2015 年の調査から. 日本生物地理学会会報, 70: 1–11.
- 俵積田貴彦・野副 滉・黒川皓平. 2019. 福岡県豊前海におけるキジハタの成熟，成長及び年齢. 福岡県水産海洋技術センター研究報告, 29: 25–31. [URL](#)